日本のオペラ公演2019
──公演データの分析とその考察──

昭和音楽大学オペラ研究所・石 田 麻 子

1. はじめに

本年鑑は発刊から今号で25冊目となった。4半世紀にわたりオペラ公演の足跡を記録してきたことになる。その間に、社会が、そしてわたしたちがどれほどのことを経験してきたのかを思い起こすとき、この年鑑のデータがそのきっかけにも、さらに証左にもなる。日本社会や日本を取り巻く環境の変化とともにオペラがあることを、本年鑑のさまざまな記録が語っていると言える。

そして、オペラのありかたにも変化が訪れている。2018年版からは、大規模会場で実施された演奏会形式やセミ・ステージ形式での上演回数を分析に取り入れることにした。いまや、セミ・ステージ形式などの上演は、オーケストラやオペラ団体や個人にとって、オペラの音楽的側面から芸術表現をおこなう一つの確かなあり方として存在するようになっているのだ。

おそらく今後は従来のような公演形態のみならず、インターネット配信などにも言及することが必要となるだろう。ただそれは、次号以降に検討を譲ることにして、今号はこれまで続けてきた手法での分析を続けることにしよう。

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（セミ・ステージ形式等の公演）の区分【表1】

全幕実施されたオペラ公演のうち、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表にそれぞれ区分している。これは、オペラハウスとして一定の形を整えている大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの座席数である。また小学校や中学校など、各学校の校内体育館や講堂などでの公演は、鑑賞した生徒数や座席数にかかわらず、例年通り中・小規模公演に分類している。

また2018年版から、総上演回数に加えて、例年はC表として掲載してきた大規模会場でのセミ・ステージ形式や演奏会形式での全幕上演回数と、上演した団体数を積み上げたデータを記載している。さらにC表掲載公演は、これまでどおり「6. 演奏会形式など」の項でまとめている。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類について

（分類手法について）

オペラ団体の公演、劇場・音楽堂等による公演、学生などが自主的に行う公演、団体や劇場間の共同制作公演などは「国内団体」公演に、高等教育機関主催の、教育研究発表を目的とした公演、団体や劇場・音楽堂等の運営する研修所による研修成果発表公演は、「教育研究団体」公演に、海外の歌劇場や音楽祭などの来日公演は「海外団体」公演に分類した。「教育研究団体」は、若手アーティストや学生を教育する場として継続的なあり方に着目して分類、一時的な学生プロジェクトなどは「国内団体」公演にしている。たとえば新国立劇場主催公演は「国内団体」、新国立劇場研修所の公演は「教育研究団体」公演となる。

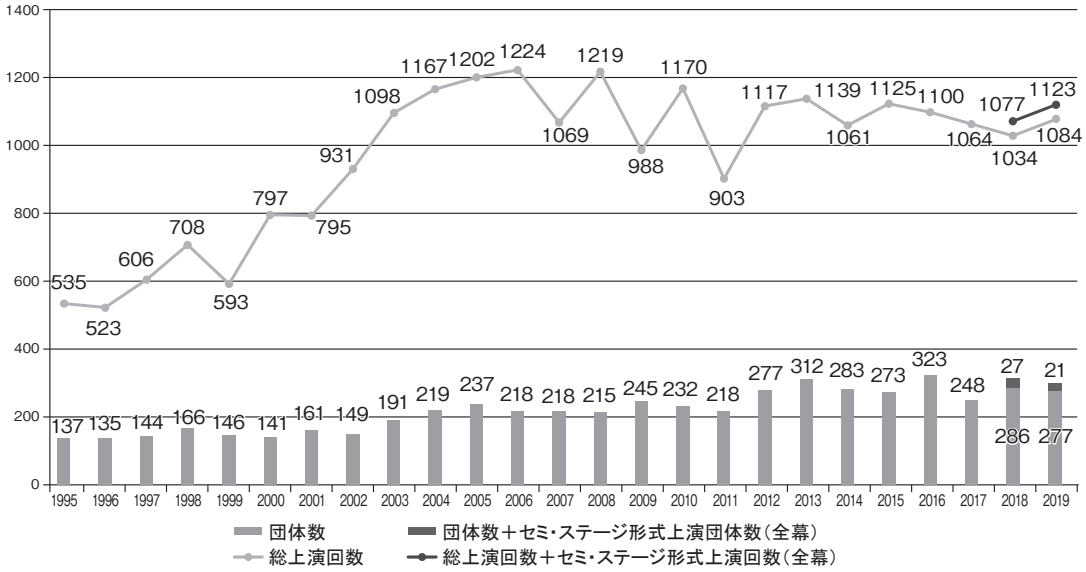
（団体数について）

劇場や団体が、他劇場や他団体と共同制作を実施した公演等は、当該組織が単独で実施

表1　分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象）

	1．国内団体	2．教育研究団体	3．海外団体
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：セミ・ステージ形式等	図1のみ○（総上演回数＋大規模会場でのセミ・ステージ形式全幕上演等）		

図1　総上演回数と活動団体数の推移



した公演とは区別したうえで、別団体とした。さらに同じ団体が組んだ相手を変えて共同制作した場合に別団体として区別しているのも従来どおりである。これは、形態の異なる組織がプロジェクトを組んで、新たな組織間連携を生み、制作体制がその都度編成されている状況を数字でとらえようとしたことによる。本年鑑所収の大規模な共同制作公演記録を見ていただくと、公演会場やかかわる組織が同じケースは散見されるものの、企図されたプロジェクトが全く異なり、ハブとなる組織が異なることがわかる。2019年で言えば、東京文化会館や新国立劇場ほかによる《トゥーランドット》、神奈川県民ホールほかによる《カルメン》、東京芸術劇場ほかによる《ドン・ジョヴァンニ》など、劇場・団体間の共同制作が盛んになればなるほど、こうしたプロジェクトの形を正確に把握する必要が出てきている。

2. 日本のオペラ公演2019年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1】

2019年は、A表とB表をあわせた総上演回数が1,084回だった。2016年の1,100回、2017年の1,064回、2018年の1,034回と減少の一途だったが、若干回復していることがわかる。

前述のとおり、図1のグラフには全体的な上演形態の拡大傾向を勘案して、大規模会場でおこなわれた、全幕のセミ・ステージ形式公演、および演奏会形式公演の数字を加えている。その起点となる2018年の数字は、総上演回数1,034回＋セミ・ステージ形式等上演回数43回で合計1,077回、そして2019年は、

表2　2019年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

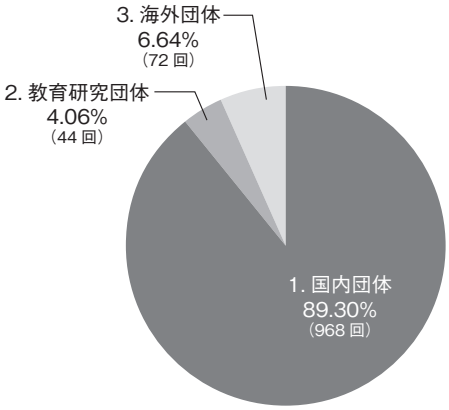
A. 大規模会場（756席以上）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	99	293
2.教育研究団体	11	22
3.海外団体	9	64
合計/総団体数・総上演回数	119	379/1084

B. 中・小規模会場（756席未満）		
カテゴリー	団体数	総上演回数
1.国内団体	169	675
2.教育研究団体	12	22
3.海外団体	1	8
合計/総団体数・総上演回数	182	705/1084

合計（A＋B）		
カテゴリー	団体数＊	総上演回数
1.国内団体	246	968
2.教育研究団体	21	44
3.海外団体	10	72
合計	277	1084

＊団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

図2　各カテゴリーの総上演回数が全体に占める割合



総上演回数 1,084 回＋セミ・ステージ形式等上演回数39回の合計1,123回である。

上演団体は、2016年には323団体だったのが、2017 年は 248 団体と一気に減少、2018 年は 286 団体と増加、2019 年は 277 団体となった。継続的に活動している団体や劇場に加えて、歌手により結成された各種プロジェクトなどもあるため、活動数は影響を受けやすく、変動の幅も大きい。

2018 年からは、上演団体数にも、セミ・ステージ形式などで上演をした団体数を加えて積み上げ棒グラフを作成している。これには既に総団体数に含まれている東京二期会などを再度算入することはせず、セミ・ステージ形式等のみを実施した団体の数だけ積み上げたものである。結果として、21 団体が新たに該当、全幕上演をした 277 団体とあわせて合計298団体となった。これには、オペラ作品を定期演奏会等で演奏している日本フィルハーモニー交響楽団などオーケストラによる活動、バロックオペラに継続して取り組んでいる（公財）北区文化振興財団などが含まれる。

2-2. カテゴリー別オペラ上演団体活動状況【表2、図2】

表 2 以降は、全幕・全曲の完全な舞台上演のみを分析対象としている。

大規模会場での公演は、2015 年の 505 回から2016年に463回へと一気に減ってから、2017 年は 430 回、2018 年は 411 回、2019 年は 379 回と一層の減少となった。一方で、中・小規模会場公演は、2016 年は 637 回、2017 年は634 回、2018 年は623 回とほぼ同数だったが、2019年は705回と大きく増加している。大規模会場での上演回数の減少がいかに顕著なものか、中・小規模会場での回数増加の状況がご理解いただけるだろう。

各地のオペラ団体や劇場・音楽堂等などによる国内団体に関しては、2017年は218団体による968回、2018年は248団体による951回、2019年は246団体による968回と、団体数は変化があるが、上演回数の点ではさほど増減はない。

教育研究団体は、2016 年が 18 団体による44回、2017年には23団体による56回、2018年は 19 団体による 45 回と減少したものの、2019 年は 21 団体による 44 回とこれも横ばいとなった。

海外団体は、2016年の来日公演は7団体で61回、2017年は7団体で40回と減少、2018

表3　2019年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
		上演回数	合計	上演回数	合計	
オペラシアターこんにゃく座*2	遠野物語	0	20	11	168	188
	タング―まほうをかけられた舌―	2		75		
	銀のロバ	2		17		
	おぐりとてるて	1		1		
	口はロボットの口	3		28		
	ふしぎなたまご	0		10		
	おじいちゃんの口笛	0		10		
	ネズミの涙	8		6		
	シグナルとシグナレス	0		1		
	森は生きている	4		9		
東京二期会*3	金閣寺	3	20	0	0	20
	サロメ	4				
	蝶々夫人	5				
	カルメン*4	4				
	天国と地獄	4				
日生劇場	ヘンゼルとグレーテル*5	13	20	0	0	20
	愛の妙薬*6	2				
	トスカ	5				
藤原歌劇団*7	ラ・トラヴィアータ	3	13	0	14	29
	蝶々夫人	2				
	魔笛	0		1		
	愛の妙薬*6	2		0		
	ランスへの旅	4				
	貞節の勝利	2				
	助けて、助けて、宇宙人がやって来た！	0		13		
日本オペラ協会	静と義経	2	2	0	0	
上位4団体合計上演回数／総上演回数	—	—	75/379	—	182/705	257/1084

＊1　大規模会場で10回以上の上演をしている団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共同での主催公演、共同制作公演を含む。
＊2　オペラシアターこんにゃく座オペラ塾公演は除く。
＊3　東京二期会は《エロディアード》をセミ・ステージ形式で、《清教徒》を演奏会形式でとりあげている。
＊4　《カルメン》は、共同制作舞台で、神奈川県民ホールで2回、愛知県芸術劇場大ホールで2回の合計4回である。
＊5　日生劇場は、《ヘンゼルとグレーテル》を、自劇場での9回のほかに、宮城（2回）、愛知（2回）で公演している。
＊6　NISSAY OPERA2019《愛の妙薬》は藤原歌劇団との共催公演。このほかに東京二期会とのNISSAY OPERA2019《天国と地獄》を提携公演としている。
＊7　藤原歌劇団と日本オペラ協会は、（公財）日本オペラ振興会内のオペラ団体。このほかに《フランチェスカ・ダ・リミニ》をセミ・ステージ形式で1回上演している。

年は6団体で38回、2019年は10団体で72回と数字のうえでは増加している。

2-3. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3では、2019年に大規模会場で10回以上の公演を実施した国内団体の活動についてまとめた。東京二期会と日本オペラ振興会（藤原歌劇団と日本オペラ協会の2団体を事業部に持つ組織）の2つの団体は自身がおこなう上演回数も多く、さらに大規模な共同制作公演にも歌手や合唱団などの人材を提供する役割をになうなど、日本のオペラ公演をつくってきた団体である。

（公財）東京二期会は、2019年の総上演回数は20回となり、大規模な公演実施団体でトップであるのは近年の傾向である。

《金閣寺》3回はフランス国立ラン歌劇場との共同制作による。ハンブルク州立歌劇場のプロダクションによる《サロメ》4回は、ヴィリー・デッカーの演出。日本で制作したプロダクション《蝶々夫人》5回は、ザクセン州立歌劇場（ゼンパーオーパー・ドレスデン）、デンマーク王立歌劇場、サンフランシスコ歌劇場との大規模な国際共同制作である。

表4-1　2019年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場プレイハウス：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1～2月	タンホイザー	R.ワーグナー	5	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	全3幕/字幕付原語上演
2月	紫苑物語	西村朗	4	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	初演/新制作/全2幕/日本語・英語字幕付日本語上演
3月	ウェルテル	J.マスネ	4	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	全4幕/字幕付原語上演
4月	フィレンツェの悲劇	A.ツェムリンスキー	4	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	新制作/全1幕/字幕付原語上演
4月	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	4	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	新制作/全1幕/字幕付原語上演
5月	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	5	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	全2幕/字幕付原語上演
6月	蝶々夫人	G.プッチーニ	4	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ	全2幕/日本語・英語字幕付原語上演
7月	蝶々夫人	G.プッチーニ	6	beyond2020プログラム　新国立劇場高校生のためのオペラ鑑賞教室2019	全2幕/字幕付原語上演
7月	トゥーランドット	G.プッチーニ	4	beyond2020プログラム　新国立劇場2018/2019 シーズンオペラ オペラ夏の祭典2019-20 Japan↔Tokyo↔World	新制作/全3幕/日本語・英語字幕付原語上演
10月	エウゲニ・オネーギン	P.I.チャイコフスキー	4	令和元年度（第74回）文化庁芸術祭オープニング・オペラ公演 国際音楽の日記念　beyond2020プログラム新国立劇場　2019/2020 シーズン開幕公演	新制作/全3幕/日本語・英語字幕付原語上演
11月	ドン・パスクワーレ	G.ドニゼッティ	5	令和元年度（第74回）文化庁芸術祭協賛公演　beyond2020プログラム新国立劇場　2019/2020 シーズンオペラ	新制作/全3幕/日本語・英語字幕付原語上演
11～12月	椿姫	G.ヴェルディ	5	令和元年度（第74回）文化庁芸術祭協賛公演　beyond2020プログラム新国立劇場　2019/2020 シーズンオペラ	全3幕/日本語・英語字幕付原語上演
—	11作品	9人	54/379	—	—

＊7月の《トゥーランドット》は、共同制作公演。新国立劇場での公演に加えて、東京文化会館で3回、札幌芸術劇場hitaruで2回、びわ湖ホールで2回、合計11回公演されている。

加えて、日生劇場との提携公演として「NISSAY OPERA 2019」ジャック・オッフェンバック生誕200周年記念《天国と地獄》が4回。2019年の国内共同制作公演で《カルメン》を神奈川県民ホールなどとの協働で実施した。これは、神奈川県民ホールで2回、愛知県芸術劇場で2回、翌年札幌文化芸術劇場hitaruでの2回公演と合計6回上演されている。東京二期会は団体単体の活動よりも、近年では国内外の大規模な劇場との共同制作や提携公演などが大きな特徴となっている。

（公財）日本オペラ振興会は、前述のとおり、2団体を事業部に持つ組織。イタリア・オペラを中心とする作品と日本オペラ作品とをそれぞれ取り上げている傾向は例年通りである。

藤原歌劇団は、《ラ・トラヴィアータ》を東京文化会館で3回、「川崎・しんゆり芸術祭

表4-2　2019年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10月	蝶々夫人	G.プッチーニ	2	新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室2019	京都市/ロームシアター京都（(公財）京都市音楽芸術文化振興財団）/新国立劇場との共催公演 全2幕/字幕付原語上演
—	1作品	1人	2/379	—	—

アルテリッカしんゆり」で《蝶々夫人》を2回上演。《愛の妙薬》を日生劇場で2回上演した。新国立劇場での《ランスへの旅》は、新国立劇場、東京二期会の合唱団の連携による4回公演となった。

藤原歌劇団が、2018年度から「ベルカントオペラフェスティバル イン ジャパン」と題して、ヴァッレ・ディトリア（マルティーナ・フランカ）音楽祭との提携公演を開始、新機軸を打ち出した。セミ・ステージ形式で《フランチェスカ・ダ・リミニ》を1回、全幕上演として《貞節の勝利》を2回公演した。このほか、令和元年度文化庁「文化芸術による子供育成総合事業―巡回公演事業―」〈音楽劇公演〉藤原歌劇団公演として、《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》を埼玉県、群馬県、福島県の13カ所の学校で巡回公演している。同じく日本オペラ振興会内の事業部である日本オペラ協会は、三木稔作曲の《静と義経》を2回公演した。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ2019」として、《ヘンゼルとグレーテル》を、劇場内公演で7回上演した後、愛知で2回、宮城で2回開催、11回公演した。これらの公演は、中学生や高校生を招待してのもの。同劇場は、同じ演目を一般観客向けの「NISSAY OPERA 2019」として、2回公演実施している。さらに「ニッセイ名作シリーズ2019」で《トスカ》を学校無料招待公演として3回、「NISSAY OPERA 2019」として一般公演2回の計5回公演した。

オペラシアターこんにゃく座は、2017年までは200回を超える公演を実施してきた団体で、2018年に188回、2019年にも同数の188回の公演が記録されている。萩京子、林光、吉川和夫、寺嶋陸也の作品が並んだ。

表に記載はないが、**びわ湖ホール**は、2017年から「びわ湖ホールプロデュースオペラ」として、ミヒャエル・ハンペ演出による「ニーベルングの指環」の上演を継続。2019年は芸術監督の沼尻竜典指揮で《ジークフリート》を2回上演した。加えて、びわ湖ホール声楽アンサンブルなど若手を中心としたキャスティングにより、中村敬一演出の《森は生きている》を自劇場で2回上演している。加えて、松井和彦の《泣いた赤鬼》を23回上演した。これはびわ湖ホールの主催事業として、平成31年度文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）の枠組みで11回、令和元年度文化庁「文化芸術による子供育成総合事業―巡回公演事業―」〈音楽劇公演〉の枠組みで12回、それぞれ巡回公演をおこなったものである。寺嶋陸也作曲の合唱劇《かなしみはちからに、～宮澤賢治 未来への手紙～》が同アンサンブルの定期公演で滋賀と東京で2回上演されるなど、若手の人材育成事業としての活動機会を確保する努力がなされている。ホール設置の声楽アンサンブルの存在が、その各事業における柱にもなりうる一方、ホールの活動を劇場外に広げる役割も担っていることがわかる。

《トゥーランドット》は、声楽アンサンブルのメンバーが合唱で加わった。東京文化会館と新国立劇場、札幌文化芸術劇場hitaruと

表5　2019年の教育研究団体公演活動データ＊1

団体名	作品名	作曲家名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		合計
			上演回数	合計	上演回数	合計	
新国立劇場オペラ研修所	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	3	3	0	0	6
	イオランタ	P.I.チャイコフスキー	0	0	3	3	
焼津中央高等学校合唱部	仮面舞踏会	G.ヴェルディ	4	4	0	0	4
足利オペラ・リリカ	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	2	2	0	0	2
大阪音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
昭和音楽大学	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
洗足学園音楽大学・大学院	ヘンゼルとグレーテル	E.フンパーディンク	2	2	0	0	2
国立音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
東京藝術大学	コシ・ファン・トゥッテ～女はみんなこうしたもの～あるいは～恋人たちの学校～	W.A.モーツァルト	2	2	0	0	2
8団体	7作品	5人	—	19/379	—	3/705	22/1084

＊1　大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が2回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位の公演、有志による公演などは含まない。

の提携公演として、同ホールでも2組のキャストによる2回公演がおこなわれた。このほか演奏会形式により、プーランク作曲の《声》が「近江の春びわ湖クラシック音楽祭2019沼尻竜典オペラセレクション」でおこなわれている。

表4-1と4-2では、**新国立劇場**の公演をまとめた。新国立劇場は、新制作が5つだったことが特筆される。2018/2019シーズンは、オペラ部門芸術監督に就任した大野和士が、オペラ公演企画の指揮を執って1年目の年である。2019年1月からの新制作としては、《紫苑物語》4回、《フィレンツェの悲劇》と《ジャンニ・スキッキ》が各4回、そして2020年に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックに向けての企画となった《トゥーランドット》が4回上演された。《トゥーランドット》は、ほかの3つの劇場での公演を含めると11回公演と、大型企画として華やかに上演された。

2019/2020シーズンが10月に開始した。シーズン最初のプログラムは、ドミトリー・ベルトマン演出、アンドリー・ユルケヴィチ指揮の《エウゲニ・オネーギン》4回公演。5回の上演が予定されていたのだが、うち最終日が台風で公演中止となっている。《ドン・パスクワーレ》は5回の公演がおこなわれた。

新国立劇場が開場以来レパートリーとしてきた作品も劇場経営の安定には欠かせない。《タンホイザー》5回、《ウェルテル》4回、《ドン・ジョヴァンニ》5回、《椿姫》5回と人気演目であり、これまでに同劇場が上演してきたなかでも一定の評価を獲得してきた作品が並んだ。《蝶々夫人》は、本公演4回に加えて、キャストと指揮者などのスタッフをかえて「新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室2019」として6回、さらに「新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室2019」として関西で2回の合計12回上演された。同作が同劇場のレパートリーとして、新国立劇場が担うキャストや観客にかかる人材育成や、地域への広がり確保といった複数の機能確保に貢献しているのである。

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体の公演は、2019年は44回。2018年は45回だったのでほぼ同数である。各地の芸術系大学での教育成果披露の場、さらに劇場やオペラ団体が運営する研修所等の若手声楽家たちの成果披露の機会となっている。

表6-1　2019年海外団体*1の公演活動データ（A.大規模会場）

形態*2	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催都市数
巡回	1月	チェコ	プラハ国立劇場（スタヴォフスケー劇場）	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	14	14	12
その他	5月	イギリス	ディーヴァ・オペラ	後宮からの誘拐	W.A.モーツァルト	3	3	1
巡回	6月	イタリア	ボローニャ歌劇場	リゴレット	G.ヴェルディ	4	9	3
				セヴィリアの理髪師	G.ロッシーニ	5		4
拠点	9月	イギリス	英国ロイヤル・オペラ	ファウスト	C.グノー	4	8	2
				オテロ	G.ヴェルディ	4		2
その他	9月	イタリア	ボローニャフィルハーモニー管弦楽団	蝶々夫人	G.プッチーニ	4	4	1
その他	10月	オーストラリア	シドニー・チェンバー・オペラ	ハウリング・ガールズ	D.リケットソン	2	2	1
巡回	10~11月	イタリア	トリエステ・ヴェルディ歌劇場	椿姫	G.ヴェルディ	14	14	12
巡回	11月	ポーランド	ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	5	8	5
				魔笛	W.A.モーツァルト	3		2
拠点	11~12月	ロシア	マリインスキー劇場	スペードの女王	P.I.チャイコフスキー	2	2	1
—		6ヶ国	9団体	11作品	7人	64	64/379	24都市

表6-2　2019年海外団体*1の公演活動データ（B.中・小規模会場）

形態*2	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計/総上演回数	開催都市数
その他	9月	スイス	バーゼル歌劇場	ムルメリ	—	8	8	1
—		1ヶ国	1団体	1作品	—	8	8/705	1都市

＊1　劇場名は、主催者表記に準じる。
＊2　形態の分類手法は以下のとおり。
「拠点型」：1回の来日で、4都市以下での公演を行う歌劇場公演。東京23区とそれ以外の東京都内の市は分け、各1都市として区別する。
例：東京文化会館、府中の森芸術劇場での開催の場合、異なる2都市での開催とする。
「巡回型」：1回の来日で、5都市以上で公演を行う歌劇場公演。
「その他」：音楽祭、合唱団などの芸術団体、実行委員会やプロジェクト等による公演。いわゆる歌劇場全体の引越し公演とは異なる形態もある。

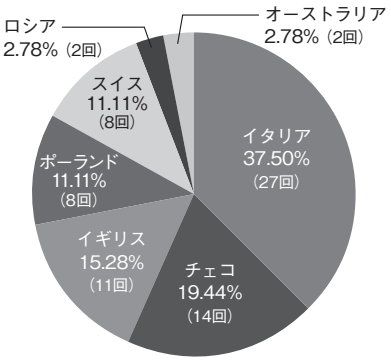
例年、モーツァルトを中心としたアンサンブル作品が上演される機会が多いのは、若い歌手たちの声の準備状況や、教育研究機関ならではのアンサンブル練習につながる重要なレパートリーだからである。各教育研究機関で毎年おこなわれる公演は、組織にとっても大型催事である。たとえば大学での学生のオペラ公演は、声楽のみならず、指揮、管弦楽、マネジメント、スタッフなどの役割で学生や教員、大学運営側も総出でかかわる恒例行事ともなっている。

2-5. 海外団体公演【表6-1、6-2、図3】

海外団体公演は、2016年が7団体による61回公演、2017年は7団体による40回、2018年は6団体による38回となり、東日本大震災以降減少したこのカテゴリーの公演回数が増加する気配はなかった。2019年は合計で72回と大幅に増えたようにも感じられるのだが、実際はどうだったのか検証してみよう。

大規模な歌劇場による上演形態である「拠点型」公演（4都市以下での公演）としては、2019年は英国ロイヤル・オペラが《ファウスト》《オテロ》の各4回公演をおこなった。いずれの公演もアントニオ・パッパーノの指揮で、《ファウスト》はデイヴィッド・マクヴィカー演出、《オテロ》はキース・ウォーナー演出作品である。《ファウスト》1回と《オテロ》2回は、神奈川県民ホールでの上演、あとの5回は東京文化会館での上演と典型的な「拠点型」公演のスタイルとなり、華やか

図3　2019年海外団体の公演（全72回）・所属国別割合



に上演がおこなわれた。

このほかには、11月から12月にかけて来日したマリインスキー劇場が《スペードの女王》を2回、《マゼッパ》をコンサート形式で1回上演している。

「巡回型」公演（5都市以上での公演）をあげてみよう。1月にチェコのプラハ国立劇場（スタヴォフスケー劇場）が《フィガロの結婚》を12都市で14回実施した。イタリアからは2つの歌劇場が巡回公演をおこなっている。まず6月にボローニャ歌劇場が6都市で《リゴレット》4回と《セヴィリアの理髪師》5回、10月から11月にかけて来日したトリエステ・ヴェルディ歌劇場が《椿姫》を全国12都市で14回公演した。東欧からの劇場は先のプラハ国立劇場に加えて、ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場が《フィガロの結婚》を5回、《魔笛》を3回の合計8回、全国6都市で上演した。こうした「巡回型」公演は東欧系の劇場がおこなってきたスタイルとして定着していたが、近年はイタリア各地の歌劇場もこの形態をとるケースが出てきていることが特徴となっている。

そのほかにも教育プログラム部門と若手歌手が来日しておこなわれたバーゼル歌劇場の《ムルメリ》の8回公演などが記録されている。

2019年は、このように多様な形態で海外団体の公演がおこなわれた結果、上演回数が増加したと言える。

3. 指揮者と演出家

（指揮者）

2019年に登場した指揮者は、国内外あわせて211人。

2019年に全幕上演に携わった日本人指揮者は、183人が記録されている。大規模会場で最も登場回数の多かった指揮者は大野和士で合計15回を記録した。新国立劇場などの共同制作《トゥーランドット》で11回、新国立劇場《紫苑物語》4回である。これに加えて、サントリーホールの《リトゥン・オン・スキン》にも登場しており、とくにその活動が目立った年となった。次に、日生劇場《ヘンゼルとグレーテル》の指揮で角田鋼亮が13回となった。さらに沼尻竜典が10回で続く。ただしこれは《フィレンツェの悲劇》と《ジャンニ・スキッキ》のダブル・ビルを4回ずつ8回としたためだ。これに、びわ湖ホールで進行している「ニーベルングの指環」《ジークフリート》2回をあわせた数である。この他に、《声》を演奏会形式で振っている。

海外の指揮者は、28人の名前が記録されている。アントニオ・パッパーノが英国ロイヤル・オペラの来日公演で8回となっているが、このほかに複数のプロダクションを指揮した者はいない。「巡回型」では、トリエステ・ヴェルディ歌劇場の来日公演を振って、ファブリツィオ・マリア・カルミナーティが14回で最多となった。

（演出家）

2019年は202人の演出家が記録された。この数字には連名での演出家は含め、再演演出家は含めていない。海外の演出家は30人、国内は172の人とグループの名前があがった。

ここでは大規模会場での演出の多かった演

表7　2019年オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回
2016年	51(53)人	99作品	669回	52人	86作品	431回	103(105)人	185作品	1100回
2017年	41人	85作品	607回	54人	83作品	458回	95人	168作品	1065回
2018年	44人	85作品	640回	53人	84作品	394回	97人	169作品	1034回
2019年	50人	103作品	658回	54(57)人	85作品	426回	104(107)人	188作品	1084回

＊（　）内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。

出家を中心に取り上げる。岩田達宗が、大規模会場での演出を11回、中・小規模会場で43回の合計54回となっている。大規模会場公演での演出作品は、堺シティオペラの《黒蜥蜴》2回、北海道二期会《椿姫》1回、杉並区民オペラ《こうもり》2回、ひろしまオペラ・音楽推進委員会《魔笛》を2回、大阪音楽大学第55回オペラ公演の《カプレーティ家とモンテッキ家》2回、びわ湖ホールの《泣いた赤鬼》2回である。

岩田と共に突出しているのが、大規模会場での公演が22回だった粟國淳である。藤原歌劇団の《ラ・トラヴィアータ》3回、新国立劇場オペラ研修所の《ドン・ジョヴァンニ》3回、新国立劇場の《フィレンツェの悲劇》《ジャンニ・スキッキ》が4回ずつ、藤原歌劇団の《愛の妙薬》が2回、東京音楽大学の《秘密の結婚》1回、日生劇場の《トスカ》が5回だった。

中村敬一は、大規模会場公演が12回、中・小規模会場での演出が7回の合計19回を演出している。びわ湖ホールほかの《森は生きている》4回、四国二期会の《椿姫》2回、名古屋二期会の《ホフマン物語》2回、国立音楽大学の《ドン・ジョヴァンニ》2回、熊本シティオペラ協会の《ラ・ボエーム》1回、とりアートオペラの《ヘンゼルとグレーテル》の1回である。

このほか、広崎うらんが日生劇場の《ヘンゼルとグレーテル》で13回、栗山民也が新国立劇場の《蝶々夫人》で12回などとなっている。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

2019年は海外の作品上演は658回となり、2018年の640回から回数が増え、さらに作品数が2018年の85作品から2019年は103作品と大幅に増加した。1作品あたりの公演数が少ないものの、多様な作品上演がおこなわれたことになる。日本の作品の上演回数は、2018年は394回と大幅に減少したが、2019年は426回と2017年の水準に戻しそうな気配である。2019年に上演された日本のオペラ作品数は85作品とこれまでとほぼ変わらない。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

2019年は《フィガロの結婚》が45回で1

表8-1　2019年に日本で上演された海外のオペラ作品
（全103作品中、大規模会場での上演実績のあるもの上位18作品、タイトルは便宜的に統一）

No.	作品名	作曲家名	A.大規模会場	B.中・小規模会場	合計
1	フィガロの結婚	W.A.モーツァルト	25	20	45
2	椿姫	G.ヴェルディ	30	6	36
3	カルメン	G.ビゼー	21	11	32
4	ヘンゼルとグレーテル	E.フンパーディンク	20	9	29
5	蝶々夫人	G.プッチーニ	25	3	28
6	魔笛	W.A.モーツァルト	7	17	24
7	こうもり	J.シュトラウスⅡ世	6	17	23
8	ドン・ジョヴァンニ	W.A.モーツァルト	16	6	22
9	コジ・ファン・トゥッテ	W.A.モーツァルト	2	18	20
10	トゥーランドット	G.プッチーニ	13	6	19
10	ジャンニ・スキッキ	G.プッチーニ	11	8	19
12	ラ・ボエーム	G.プッチーニ	9	8	17
13	トスカ	G.プッチーニ	9	6	15
14	メリー・ウィドウ	F.レハール	5	9	14
15	愛の妙薬	G.ドニゼッティ	3	10	13
16	仮面舞踏会	G.ヴェルディ	8	2	10
16	シンデレラ	J.マスネ	1	9	10
18	子どもと魔法	M.ラヴェル	2	7	9
合計/総上演回数	—	—	213/379	172/705	385/1084

表8-2　2019年に日本で上演された海外の作曲家　（全50人中、上位11人）

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A.モーツァルト	122
2	G.プッチーニ	106
3	G.ヴェルディ	71
4	G.C.メノッティ	45
5	G.ビゼー	32
6	E.フンパーディンク	29
7	G.ドニゼッティ	27
8	J.シュトラウスⅡ世	24
9	F.レハール	16
10	P.I.チャイコフスキー	14
10	J.マスネ	14
合計/総上演回数	—	500/1084

位になった。大規模会場の公演で、プラハ国立劇場（スタヴォフスケー劇場）、ポーランド国立ワルシャワ室内歌劇場がそれぞれ「巡回型」公演の演目としてとりあげたこと、関西二期会や昭和音楽大学、このほかにも複数のオペラ団体がとりあげたことが要因である。

2位の《椿姫》は、新国立劇場のシーズン・オペラ公演、藤原歌劇団の本公演のほか、トリエステ・ヴェルディ歌劇場の「巡回型」公演がおこなわれたこと、さらに川崎市民オペラや四国二期会など各地の組織が上演したことによる。

モーツァルト、プッチーニ、ヴェルディが上位を占めるのも例年同様の傾向で、2019年はチャイコフスキーやマスネが10位以内に入ったことが特徴だろう。日本初演となった海外の作品は藤原歌劇団によるスカルラッティの《貞節の勝利》がある。このほか、いずれも演奏会形式のために分析対象外だが、サントリーホールによるG.ベンジャミンの《リトゥン・オン・スキン》、藤沢市民オペラによるロッシーニの《湖上の美人》、藤原歌劇団の《フランチェスカ・ダ・リミニ》初演は優れた上演成果として言及しておきたい。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

生まれては消えていく作品が数多くあるなかで、残っていく作品は初演後も繰り返し上演されることで磨かれ、多様な組織がとりあげるようになってレパートリーとして定着する。これまでに、多くの日本のオペラ作品が創作初演されてきたが、2019年に初演された作品でレパートリーとして残っていくものがいくつあるだろうか。そのためには、作品を実演する立場の歌手、指揮者などの演奏者のみならず、公演企画をするオペラ団体や劇場が、繰り返し再演することで、作品を育てていくことが求められるだろう。

頻繁に再演される日本のオペラ作品の代表例に、林光の《森は生きている》松井和彦の《泣いた赤おに》があげられる。2019年も複数のオペラ団体や劇場がとりあげて、着実に日本語によるオペラ作品として定着している。大がかりだったり、ドラマティックな内容だったりするわけではないものの、物語が子どもにも大人にも多くの気づきを与えてくれ、学校や家族でも楽しめる内容だ。日本語歌唱での歌詞も良く聞こえる作品であり、こうした作品が着実に上演されている状況にある。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図4、表12】

2019年は、全国47都道府県すべてで全幕のオペラ公演が記録された。

上演回数は東京が1位、2位に神奈川、3位が愛知となった。大阪、広島が同数で続き、兵庫、埼玉、北海道、滋賀、千葉が10位までに入っている。

東京は、2017年は390回、2018年は422回と増加、2019年は409回と減少に転じたが公演の主催者には次のような変化があった。国内団体による公演が、2017年は348回だったが、2018年は387回へと増えたのち、2019年は356回と減少している。一方で、海外団体の上演回数は、2017年は19回、2018年も同じく19回だったが、2019年は小規模な公

表9-1　2019年に国内で上演された日本のオペラ作品（A.大規模会場）　＊大規模会場で、上演回数5回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	森は生きている	林　光	8	3	びわ湖ホール / 兵庫県立芸術文化センター / オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で10回公演あり
2	ネズミの涙	萩　京子	8	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場で6回公演あり
3	泣いた赤おに	松井　和彦	7	3	山形オペラ協会 / びわ湖ホール / 西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」	中・小規模会場で25回公演あり
合計 / 総上演回数		—	23/379	—	—	—

表9-2　2019年に国内で上演された日本のオペラ作品（B.中・小規模会場）

＊中・小規模会場で、上演回数20回以上の作品。

No.	作品名	作曲家	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	タング―まほうをかけられた舌―	萩　京子	75	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で２回公演あり
2	トラの恩返し	李　在浩	44	1	オペレッタ劇団ともしび	
3	口はロボットの口	萩　京子	28	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場で３回公演あり
4	泣いた赤おに	松井　和彦	25	4	オペラ彩 / びわ湖ホール / 西日本オペラ協会「コンセル・ピエール」/ 東京文化会館	大規模会場で７回公演あり
合計 / 総上演回数		—	172/705	—	—	—

表10　2019年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	13	29	0	0	0	0	14	29	**8**
2	青森	1	1	0	0	0	0	1	1	46
3	岩手	2	2	0	0	2	2	4	4	31
4	宮城	5	13	0	0	0	0	5	13	14
5	秋田	3	9	0	0	0	0	3	9	23
6	山形	7	10	0	0	0	0	7	10	20
7	福島	4	11	0	0	0	0	4	11	17
8	茨城	4	5	0	0	1	1	5	6	28
9	栃木	6	10	1	2	0	0	7	12	16
10	群馬	3	8	0	0	2	2	5	10	20
11	埼玉	13	34	0	0	1	1	14	35	**7**
12	千葉	8	21	0	0	1	1	9	22	**10**
13	東京	101	356	5	17	9	36	115	409	**1**
14	神奈川	29	93	3	6	5	8	37	107	**2**
15	新潟	2	2	0	0	1	1	3	3	36
16	富山	2	2	0	0	1	1	3	3	36
17	石川	2	11	0	0	0	0	2	11	17
18	福井	3	3	0	0	0	0	3	3	36
19	山梨	4	8	0	0	0	0	4	8	25
20	長野	8	17	0	0	1	1	9	18	12
21	岐阜	6	19	0	0	0	0	6	19	11
22	静岡	7	13	1	4	1	1	9	18	12
23	愛知	16	51	2	4	5	8	23	63	**3**
24	三重	2	4	0	0	1	1	3	5	30
25	滋賀	4	21	0	0	2	2	6	23	**9**
26	京都	4	10	2	3	0	0	6	13	14
27	大阪	15	40	2	4	3	3	20	47	**4**
28	兵庫	20	37	1	1	0	0	21	38	**6**
29	奈良	2	3	0	0	0	0	2	3	36
30	和歌山	3	3	0	0	0	0	3	3	36
31	鳥取	3	9	0	0	0	0	3	9	23
32	島根	2	4	0	0	0	0	2	4	31
33	岡山	6	11	0	0	0	0	6	11	17
34	広島	7	44	1	3	0	0	8	47	**4**
35	山口	2	2	0	0	0	0	2	2	43
36	徳島	0	0	0	0	1	1	1	1	46
37	香川	2	4	0	0	0	0	2	4	31
38	愛媛	1	2	0	0	0	0	1	2	43
39	高知	2	4	0	0	0	0	2	4	31
40	福岡	3	8	0	0	2	2	5	10	20
41	佐賀	2	6	0	0	0	0	2	6	28
42	長崎	3	8	0	0	0	0	3	8	25
43	熊本	3	8	0	0	0	0	3	8	25
44	大分	4	4	0	0	0	0	4	4	31
45	宮崎	1	2	0	0	0	0	1	2	43
46	鹿児島	2	3	0	0	0	0	2	3	36
47	沖縄	1	3	0	0	0	0	1	3	36
合計	—	—	968	—	44	—	72	—	1084	—

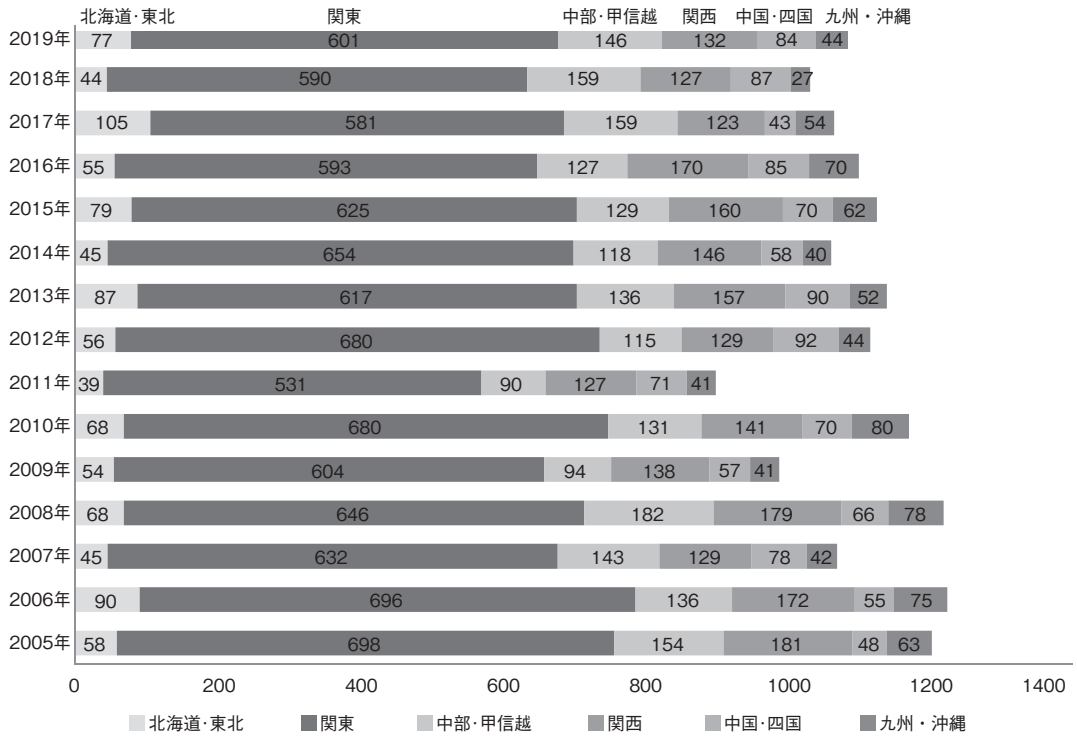
＊　愛知県立芸術大学《シンデレラ》は、大学単独制作と、大学・会場による制作の回がそれぞれ記録されているものの、後者に関しても同大学公演とタイトルに入っているため、同一組織による公演とカウントした。

表11　2019年の都道府県別・地域別、公演会場規模別分布

都道府県名	A.大規模会場		B.中・小規模会場		上演回数比率	地域
	会場数	上演回数	会場数	上演回数	総上演回数	
北海道	4	9	12	20	7.10%	北海道・東北
青　森	1	1	0	0		
岩　手	3	4	0	0		
宮　城	2	5	5	8		
秋　田	2	2	7	7		
山　形	6	7	3	3		
福　島	0	0	8	11		
地域合計	18	28	35	49	77	
茨　城	3	3	2	3	55.44%	関東
栃　木	7	10	1	2		
群　馬	3	3	6	7		
埼　玉	7	9	17	26		
千　葉	3	3	14	19		
東　京	28	168	86	241		
神奈川	13	37	37	70		
地域合計	64	233	163	368	601	
新　潟	3	3	0	0	13.47%	中部・甲信越
富　山	1	2	1	1		
石　川	0	0	2	11		
福　井	1	1	2	2		
山　梨	1	4	4	4		
長　野	2	5	8	13		
岐　阜	0	0	14	19		
静　岡	4	10	7	8		
愛　知	5	16	22	47		
地域合計	17	41	60	105	146	
三　重	2	4	1	1	12.18%	関西
滋　賀	4	11	11	12		
京　都	2	5	3	8		
大　阪	6	12	14	35		
兵　庫	7	14	9	24		
奈　良	0	0	2	3		
和歌山	1	2	1	1		
地域合計	22	48	41	84	132	
鳥　取	1	1	8	8	7.75%	中国・四国
島　根	0	0	4	4		
岡　山	1	1	8	10		
広　島	2	10	19	37		
山　口	0	0	2	2		
徳　島	1	1	0	0		
香　川	1	3	1	1		
愛　媛	0	0	2	2		
高　知	0	0	4	4		
地域合計	6	16	48	68	84	
福　岡	4	7	2	3	4.06%	九州・沖縄
佐　賀	1	1	5	5		
長　崎	0	0	8	8		
熊　本	1	2	5	6		
大　分	0	0	3	4		
宮　崎	2	2	0	0		
鹿児島	1	1	2	2		
沖　縄	0	0	1	3		
地域合計	9	13	26	31	44	
合　計	**136**	**379**	**373**	**705**	**1084**	**—**

同一館内の複数の会場、同一大学内の複数の会場は、規模別に1カ所とした。
例：新国立劇場オペラ劇場、新国立劇場中劇場は大規模会場で1カ所。
　　新国立劇場小劇場は中・小規模会場で1カ所。

図4　地域別総上演回数推移（単位・回）



演も含めると36回と大幅に増えている。教育研究団体は、2017年は23回、2018年は16回と減少して、2019年も17回と横ばいである。

2位となった神奈川県は、複数の大規模な拠点が公演の舞台となっている。神奈川県民ホールやよこすか芸術劇場での海外団体の公演をはじめ、テアトロ・ジーリオ・ショウワなど、オペラ劇場としての機構を備えた会場で、多くの国内団体が活動をおこなった結果である。

3位の愛知県は、愛知県芸術劇場が舞台芸術公演の拠点として、共同制作事業をはじめとする大規模な公演を実施していることに加えて、名古屋二期会など地域で活動するオペラ団体のほか、教育研究団体の公演がおこなわれていることが理由である。

関西圏では、大阪府が4位、兵庫県が6位となった。大阪府では、フェスティバルホールでの海外団体公演のほか、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウス、堺シティオペラなどの地域の団体の活動が大規模な会場でおこなわれている。小規模な館での各オペラ団体による活動も継続していて上位にはいった。

広島県が4位になったのも、例年のことだが、オペラ団体の公演がアステールプラザを会場にして数多くおこなわれたこと、そのほかの会場でもオペラ団体が着実に毎年の公演を重ねていることが理由である。

表11では、大規模会場での公演、中・小規模会場での公演別の実施状況がわかる。

大規模会場での公演が確認できない県が、福島県、石川県、岐阜県、奈良県、島根県、山口県、愛媛県、高知県、長崎県、大分県、沖縄県となった。これらの地域では、中・小規模会場や学校公演での公演は実施されていたとしても、地域の人びとにそれらの公演が広く共有されている状況ではないだろう。地域間格差が広がっているとしてもよいのでは

表12　2019年の会場別総上演回数（A.大規模会場で6回以上開催の会場。［　］内は同一施設内のB.中・小規模会場）

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	総上演回数*1	客席数*2(席)	総客席数(席)*3
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	58	0	0	58	64［67］	1,814	111,440［112,514］
		新国立劇場中劇場	3	3	0	6		1,038	
		新国立劇場小劇場	0	［3］	0	［3］		［358］	
2	東京都	東京文化会館 大ホール	19	0	14	33	33［41］	2,303	75,999［81,191］
		東京文化会館 小ホール	［8］	0	0	［8］		［649］	
3	東京都	日生劇場	20	0	0	20	20	1,330	26,600
4	愛知県	愛知県芸術劇場大ホール	6	0	2	8	8	2,500	20,000
4	滋賀県	びわ湖ホール大ホール	4	0	2	6	8［1］	1,848	12,696［13,019］
		びわ湖ホール中ホール	2	0	0	2		804	
		びわ湖ホール小ホール	［1］	0	0	［1］		［323］	
4	広島県	JMSアステールプラザ大ホール	8	0	0	8	8［14］	1,204	9,632［11,622］
		JMSアステールプラザ中ホール（能舞台）	［2］	0	0	［2］		［547］	
		JMSアステールプラザ多目的ホール	［4］	0	0	［4］		［224］	
7	神奈川県	神奈川県民ホール大ホール	2	0	5	7	7［9］	2,438	17,066［17,932］
		神奈川県民ホール小ホール	［2］	0	0	［2］		［433］	
8	神奈川県	テアトロ・ジーリオ・ショウワ	4	2	0	6	6	1,367	8,202
8	神奈川県	多摩市民館大ホール	6	0	0	6	6	908	5,448
合計/総上演回数 客席数・総客席数		—	132［17］	5［3］	23	160［20］	160［180］/379［1084］	17,544［2,534］	240,483［249,928］

＊1　大規模会場の総上演回数は、併設する中・小規模会場の上演回数を含めた数字を［　］内に表した。
＊2　各会場の1回あたりの客席数は、オーケストラピット設営の有無、会場の使用形式にかかわらず、最大値とした。
例（新国立劇場中劇場1038席/回）
＊3　大規模会場の総客席数は、併設する中・小規模会場で行われた上演の客席数を含めて［　］内に表した。

ないだろうか。

表12の会場別総上演回数を見てみよう。新国立劇場は、2018年は73回で、2019年は64回（中・小規模会場を入れると67回）と前年より減少、東京文化会館は、2018年は28回（中・小規模会場を入れると31回）で、2019年は33回（中・小規模会場を入れると41回）へと前年よりも増加、日生劇場は2018年が21回、2019年は20回と前年とほぼ同数となった。大規模会場での公演は日本全国で379回であるが、そのうち160回、42%超がこれら上位10館でおこなわれている計算である。

6. 演奏会形式など

演奏会形式やセミ・ステージ形式などの上演記録はどうだっただろうか。2017年には302回、2018年は384回、2019年は499回が記録されている。ただし、ハイライトや大幅にカットされた上演なども含んでいるため、この数字と変化はあくまで目安である。近年の傾向として、これらの公演の中には、新作初演、特徴のある公演などが多く含まれているので、全幕上演を中心に、いくつかの事例を取り上げてみたい。

（オーケストラ主催の演奏会形式等上演）

オーケストラは、日本フィルハーモニー交響楽団がアレクサンドル・ラザレフ指揮で《カヴァレリア・ルスティカーナ》を2回とりあげ、NHK交響楽団がパーヴォ・ヤルヴィと《フィデリオ》を2回とりあげた。

このほか愛知祝祭管弦楽団が、《神々の黄昏》を全曲演奏し、「ニーベルングの指環」を完結させた。琉球交響楽団は沖縄オペラア

カデミーとともに《カルメン》を演奏会形式でとりあげている。こうした各地のオーケストラがおこなった公演も重要な鑑賞機会となる。

（音楽祭や劇場・音楽堂等主催の演奏会形式等上演）

東京・春・音楽祭が、ダーヴィト・アフカム指揮NHK交響楽団で《さまよえるオランダ人》を2回演奏会形式でとりあげている。

北とぴあ国際音楽祭は、寺神戸亮指揮、レ・ボレアードの演奏によりバロック作品を中心とする上演活動を毎年実施しており、2019年は《リナルド》を2回上演した。

第57回**大阪国際フェスティバル**2019の一環で大阪フィルハーモニー交響楽団がシャルル・デュトワ指揮で《サロメ》を1回演奏している。

世界初演や日本初演となる作品も複数上演された。サントリーホールは、「**サントリーホール サマーフェスティバル**2019 ザ・プロデューサー・シリーズ 大野和士がひらく」で、《リトゥン・オン・スキン》を大野自身の指揮で2回とりあげて、日本初演した。

調布国際音楽祭2019では、バッハ・コレギウム・ジャパンが《後宮からの逃走》を2回、鈴木優人の指揮による演奏会形式で上演し、第24回**宮崎国際音楽祭**では《ラ・ボエーム》を広上淳一の指揮で上演している。こうした各地の音楽祭でのオペラ上演はとくに大型の企画としてプログラムの中核となる。

東京芸術劇場は、佐藤正浩指揮で《放蕩息子》《ジャミレ》を演奏会形式で上演、これは東京芸術劇場コンサートオペラvol.7での演奏だった。

海外団体では、**マリインスキー劇場**が、ワレリー・ゲルギエフ指揮で《マゼッパ》を1回演奏している。こうした上演される機会の少ない珍しい作品を聞けるのも、演奏会形式ならではのことだろう。演奏する側も聞く側も音楽に集中できるというメリットもある。

7. まとめ

日本では、第二次世界大戦後、高度経済成長の時期を経て、バブル崩壊、リーマンショック、東日本大震災など、社会を揺るがすような大きな事件や経済状況を反映しながらも、実に多くのオペラ公演がおこなわれてきた。日本国内の各地にすぐれた音響の劇場や音楽堂などが整備されて、西洋音楽の教育が盛んにおこなわれ、歌手集団のオペラ団体が各地に設立され、制作スタッフを配置してオペラ制作を継続的におこなう劇場もある。こういった状況に至るまで、国内外のオペラ関連組織が多様な実演をおこない、第二次世界大戦からの復興後、2019年まで駆け抜けてきた印象である。オペラという大きな舞台芸術において、その関係性が凝縮して映し出されてきた。それを本年鑑では観察し、まとめてきたのである。

その間に、どれほどの名上演がうみだされてきたことか。そして、それらの上演を通じて多くの観客がオペラに魅了され、定着してきたことが大事な財産でもある。海外団体の公演は減少したままさほど回復はしていないものの、毎年のように大型の引越公演がおこなわれている状況は続いている。さらに、国内の劇場や団体による大規模な共同制作や国際共同制作が日本の大きな会場で実施されて、大型の公演を鑑賞する機会は失われてはいない。各館、各団体が公演を続けていて、それらを支える国や自治体からの支援の枠組みも準備されてきた。同時に、インバウンドをにらんだ日本語および英語字幕の同時投影などもおこなわれるようになり、海外からの観客の誘致も意識した状況になっている。

こうした状況は社会の変化が背景にあってのことである。オペラを通じて多くの社会の変化やオペラと社会との関係性が見て取れる

ということは変わらない。オペラ作品、オペラ上演は社会を映す鏡なのだ。

（本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。）